

小林秀雄の発想法

尾 西 陽 一

I 文体と発想

言語的事実と即して国語教育は推進されるべきで、国語教育にたずさわるものは、A表現Vを深くみつめていかななくてはならない。A表現Vを媒介としてA教育Vの営みが行われるところに国語教育の特殊な立場があると考えられる。

ここでは、国語教師としての私が、A表現Vの理解の一方方法として、A文体VとA発想Vとの関連性の問題について学習したことがらをしるすことにした。

新しく改訂された学習指導要領にも、「読むこと」の目標を達成するための留意事項として、「意図や発想と表現の関連に注意しながら読むこと」と記されている。このA発想Vの探究ということも、国語教育における一視点として重要な意義をもつものであることは多くの論者に指摘されていることはいずれまでもない。

二

批評を文、学にまで高める要因となるものは「文体」である(2)と江藤淳がかつて断言している。文体は思想の表現形式として、その形式、様式の方にウエイトを置いては正しくない。各々の言語主体に

より、その文体というものは個性的なものを持っているべきであり、ろ。

かつて中村光夫が小林秀雄について解説をした文章の中で、

氏は評論を書き出した最初から、文体についてある明りょうな自覚を持っていた人です。文章とは現実を写すための手段であり、文が作者によって違うのは、僕等の顔が違うのと同じだといふ風に考えている人が多いなかで、氏ははじめから文章に自己の内面のリズムを生かし、それによって自分の世界を築きあげることをはっきり意図していたので、この点で周囲の文学の趨勢とはまったく逆の道を歩いています。

と小林秀雄の文体の意義について論じている。すこし引用が長くなつたが、彼の文体を考察していくばあい、一つのヒントを与えてくれる。

すなわち、(1)文体は作者のA内面のリズムVを反映している存在であり、(2)その文体が作者独特の世界を構築する機能をもつ、といふ理解がなされている。

小林秀雄が昭和の評論史において、独異な存在として評価される

のも、このA文体Vの創造ということと一体の関係にあることは否定しえない事実である。

ところで、小林秀雄自身、A文体Vについて、どのような認識をしていたのか。

三

詩を失ったリアリズムとは、無私な観察というものの過信による文体の喪失である。独特な文体を持たぬ作家の観察という様なものが一体何だろう。

ここに、彼の文体観が明示されている。リアリズムという科学的描写技術が文壇を圧倒してくると、A無私な観察Vを至上の方法とし、そのみに依拠すれば足りるという信条が定説化してしまう。

このリアリズム偏重のはてにA詩の喪失V—A文体の喪失Vという憂うべき現象が結果されると指摘しているわけである。

小林秀雄にとって文体というものは、かけがえないものであり、作品の中のA詩性V・A生命Vの生死を左右する現実的な力をもっているものと理解されている。A無私な観察Vというテクニクをのりこえた次に立つものと考えられているのである。この小林秀雄の考え方は、評論活動を営んでいくばあい、いつも彼の意識下にあったものとみてよい。彼の作品のどこを見てもユニークな文体に触れ得る。

四

森鷗外についてすぐれた論考を残している高橋義孝氏がつぎのようなこと言っている。

文体の文体たる所以のもの、そのエッセンス、その精髓は、あの文章のどこをどうつまわして探しても、それだといってあげ

(3)

示すことのできぬものである。実際、文体論の試みが種々なされているのだが、作品群の中から、その作家特有の「文体の文体たる所以のもの」を明確に把握するとは至難な仕事である。結果的には、単なる印象を語るにすぎないことになってしまふ。方法的にまことにたわいのない研究になつてしまふのである。

とにかく小林秀雄の文章に触れて「印象」を語ることにする。

(4) 世捨て人とは、世を捨てた人ではない。世が捨てた人である。(様々な意匠)

われわれが通常、「世捨て人」というばあい、「世を捨てた人」という用い方をし、そういう概念をもっている。世を捨てた人そのものに主体をおいて考えるのが一般的である。

彼の文章の中には、このような逆説的表現が多くみられる。これから、その表現における逆説性が何を意味するのか考えてみよう。

(4) 人間は考える葦だ、という言葉は、あまり有名になり過ぎた。気の利いた洒落だと思つたからである。或る者は、人間は考えるが、自然の力の前では葦の様に弱いものだ、という意味にとつた。或る者は、人間は、自然の威力には葦の様に一たまりもないものだが、考える力があると受けとつた。どちらにしても洒落を出ない。パスカルは、人間は恰も脆弱な葦が考えるように考えねばならぬと言つたのである。人間に考えるという能力があるお蔭で、人間が葦でなくなる筈はない。従つて考えを進めていくにつれて、人間が葦でなくなってくる様な気がしてくる。そういう考え方は、全く不正であり、愚鈍である。パスカルはそういうのだ。そう受けとられていさえすれば、あんなに有名な言葉とな

るのは難かしかつたであらう。(パスカル)

パスカルの有名な格言について、小林秀雄自身の見解を述べた文であるが、この文章の中に、彼自身の文体、発想上の一事実がうかがわれる。

このパスカルのことばの一般的理解のしかたは、「人間は考えるが、自然の力の前では、葦の様に弱い」、「人間は、自然の威力には葦の様に一たまりもないものだが、考える力がある」ということになっている。

△考える葦△という表現において、△葦△は△自然△の超人的力の前では、一たまりもないかよわい存在としての人間の比喩とみられている。

小林秀雄の解釈になると、「人間は恰も脆弱な葦が考えるように考えねばならぬ」という表現によくあらわれている。ここにいたって、△葦△が△自然△に対して、かよわい存在という、単なる比喩としてとられていない。△思考△による人間存在の特殊性を意味しているのではなく、人間の思考のあり方をついた言葉と理解しているわけである。

このパスカルについて論じた文章の中の、

○この言葉は有名になりすぎた。

○葦が考えるように考えねばならぬ。

という表現法は、彼の評論文の随所にみられるものであり、彼の文体の「エッセンス」とでも言えるものである。

長谷川泉氏がこの文に触れて、

小林文には論理ファクターだけでなく、心理的ファクターがそれと同量以上にとり入れられている。

と指摘しているように、われわれがともすると疑うことなく使っていることばに対して、衝動的な言辭をはき、説教の心理をゆり動かす要因となっていることを痛感させられる。

・解決がついたという事は、眠りについたという事である。覚めていたければ、疑う事を止めてはならぬ。(パスカル)

こういう論断の形式、逆説性は、まさしく、彼特有のものであり、文章の中から抽出しても一つの格言としての力のみなざった表現をなしえているものである。

このような文体は、彼の発想の懷疑的、否定的性格からにじみ出たものと言える。

Ⅰ 「詩魂」の意味するもの

一

批評家がどういふ精神に支えられて批評活動を展開しているのか、これまた大きな問題である。

ここでは、小林秀雄の精神を支えるものについて考えてみることにする。

小林秀雄が志賀直哉論を二度にわたって、書いているが、そのなかで次のようなことを言っている。

私にこの小論を書かせるものは、この作者に対する私の敬愛だが、又、騒然と紛飾した今日新時代宣伝者に対する私の嫌悪でもある。

元来、批評というものは、常に軽蔑、憐憫、尊敬、拒否、容認らの個の感情が随伴する傾向があることは、否定しえない。批評家によって、その批評の対象が裁断されるとき、批評家独自の感情の濃淡

があらわれてくる。そこに批評文学の特殊性があらう。

さて、右にあげた文章のもつ意義についてもう一步考えてみよう。

小林秀雄が志賀直哉論を書くとする動機は志賀直哉への入敬愛V、ならびに入騒然と紛飾した新時代宣伝者に対する嫉悪Vの二つであるというわけである。この二つのなかで、紛飾した理論に決し、やつつけていこうとする態度が、彼の批評精神の根底をなしているものの一つとみてよい。仮面を装って、いかにも真実らしくふるまうものへの、漂蕩といわれるほどの入嫉悪Vの情が彼の精神の底に流れている。ところで、小林秀雄の入嫉悪Vの対象である入新時代宣伝者Vの装っている仮面とは何であらうか。

私はかつて氏を評して古典的だという言葉を聞かないし、また、氏の原始性を強調した言葉を聞かない。おそらくこれは氏の全作家が比類なく繊細な神経をもつて裝飾されているが為だ、と私は思う。⁽⁹⁾

この文に明らかであるように、入裝飾Vされた志賀直哉の入繊細な神経Vにまでわされてしまい、それがいかにも近代人特有の入繊細な神経Vと誤解する態度をいうのである。

事象の表面のみをなでまわすにすぎない観念論者——それは小林秀雄にとつて軽蔑対象以外のなにもでもない。

彼の批評精神には、もののリアルな姿体を盛りなく、全的に感覺しようとする強靱な入視力Vが根底をなしている。この鋭敏な入視力Vによりすべての入紛飾Vははらいのけられ、みごとに捨象されてしまふ。

二

小林秀雄にとつて入視力Vとは、もの、いわば実在の本質を透視する力と理解してよい。

この入視力Vが彼の批評における発想の根底をなすものである。

彼(吉田兼好)には常に物が見えている。人間が見えている、見え過ぎていて。どんな思想も意見も彼を動かすに足りぬ。評家は彼の尙古趣味を云々するが、彼には趣味という様なものは全くない。古い美しい形をしつかり見て、それを書いただけだ。⁽¹⁰⁾

兼好に対する共感がのべられている文であるが、小林秀雄がいかに入見るVことの意義を高く評価しているか、如実にうかがわれよう。

同じ文章の中で、
徒然草の二百四十幾つの短文は、すべて彼の批評と観察との冒險である。

と小林秀雄らしいみかたをしているが、この入観察Vの機能に優位性をみとめるところに一つの問題が潜んでいるのである。

ところで彼における入視力Vはどのような構造をもっているのだろうか。入観察Vにして、小林秀雄らしい語感を内にもっている言葉である。この入観察Vの語感を明らかにすることにより、小林秀雄における認識、発想のあり方がよりよく把握できる。

三

平家物語の冒頭の文が無常の思想を主題とする論者に反駁して、次のように述べている。

作者を本当に動かし導いたものは、彼のよく知っていた当時の思想という様なものではない、彼自らはつきりしらなかつた叙事詩人の伝統的な魂であった。⁽¹¹⁾

入詩人の魂Vすなわち入詩魂Vということばは、小林秀雄の常套語の一つにあげることができる。それだけ、この入詩魂Vには深い意味が内包されていると考えてよい。入詩魂Vを詩人の魂といいかえても、ならその本質的な意味はわからない。この入詩魂Vという

ことばは、小林秀雄のものの考え方、批評を結晶していくばあいの、
素因となるものの一つと考える。長い批評活動の間、持続的に作用
しているものである。

このことばは、前にのべた「観察V」とどのような関係にあること
ばであろうか。この両者の関連性について、以下述べてみることに
する。

人は志賀氏（志賀直哉のこと）の自然描写の美しさを言う。あ
あいう美しさは観察と感動と同じ働きを意味する様な作家でな
ければ、現せるものではない。⁽¹²⁾

志賀直哉の小説にあらわれている自然描写の非凡さは、何に由来し
ているのか説明している文である。ここに用いられている「観察V
は、自然科学用語としてのそれはやや趣を異にする。「感動V
と同じ動きを意味するということは「観察Vにおける対象の没個性
的な把握という方法を拒否する。観察者の「人格Vと遊離したもの
であってはならない。

齋藤茂吉のいう「実相観入の「観入Vの語源を求めて、空海の「須
らく心を凝らして、其物を目撃すべし、便ち心を以て之を撃ち、深
く其の境を穿れ」という章句を引用し、この「心で物を撃つ」こと
が観の本質をなすといっている。

小林秀雄の用いる「観察Vも、この観照態度と同様なものである。
志賀直哉の「豊年蟲」を評して、

こんな小品にも達人の表現があると言いたいのではないが、達
人でなければかような小品を創ろうとはしないだろう。この小品
に、氏の魂の形態が強力にはないが、また強力にはない為
に最も簡明に結晶化されている様に私には見えるのだ。⁽¹³⁾

と表現の奥底にあるものを探ぐり出している。「魂の形態Vとは、
やはり表現を形成するいわば形成素とでもいふべきものであろう。

このことばも「詩魂V」の概念と同一のものと解してよい。「観察V」
「詩魂V」ということばは、小林秀雄において、単なる技法ではな
く、むしろ、技法以前の心的態度とみななくてはならない。

批評家として独自の評論文を書いてきた小林秀雄にとって、「詩
魂V」による対象の凝視という態度が、発想の根底をなすものであ
った。

「観察Vも「詩魂Vも、もろもろの意匠をばざとり、赤裸々な現実
をえぐりとる唯一の武器であり、これをばなれて、彼の評論は成り
たないであろう。まれにみる純正な「視力V、いわゆる鑑識眼に
よって、彼の批評は、一つの典型にまで高められたのである。

- (1) 高等学校学習指導要領解説国語篇 (P29)
- (2) 批評と文体 (朝日新聞 35・2・3)
- (3) 「小林秀雄論」の流行 (朝日新聞 36・6・14)
- (4) 志賀直哉 (新潮社「作家の顔」所収) (P63)
- (5) 鷗外の文体—Neop hilo logy の問題
(筑摩版現代文芸評論集三所収) (P342)
- (6) 解釈と鑑賞 (35年春の臨時増刊号) P74
- (7) 志賀直哉 (「作家の顔」P43)
- (8) 文学研究の諸問題 P40
- (9) 志賀直哉 (一) P49
- (10) 「徒然草」(筑摩版小林秀雄集所収) P238
- (11) 「平家物語」(同右) P240
- (12) 「私の人生観」(同右) P206
- (13) 志賀直哉 (一) P57

(37・8・28記)

(大分県竹田高校教諭)